
ちわドラ！

あーみん@マツサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちわドラ！

【Nコード】

N77777K

【作者名】

あーみん@マツサ

【あらすじ】

空前の超弩級ラブコメとらドラ！——川嶋亜美Ver

基本的には大河も
みのりんも好き。

だがあーみんは俺の嫁！

って方推奨小説。

内容は原作に沿っており
ゲームの場合と同じく
原作から展開が変わります。

原作読んでる人向けですが
原作を知らない方でも
読めるように作ったつもり。

現在著作権の侵害にならないよう、許可を頂きました。

だから著作権侵害の心配はなっしんぐ！

竹宮先生公認の同人！

本書に対するご意見、ご感想、お寄せください。
↑
いい作品にしたいのでアドバイス下されると嬉しいです。

誤字脱字は仕様ではありません。
みつけたらぜひ教えて下さい。

人物紹介

高須たかす 竜児りゅうじ

きれい好き&料理も得意、
どこに嫁に出しても恥ずかしくない高校二年生。
目つきの悪さは単なる遺伝。
クラスメートの櫛枝みのりにひそかに想いを寄せている。

川嶋かわしま 亜美あみ

女優を親にもつ、現役高校生モデル。北村の幼馴染み、季節外れの転校生。
——誰もが賞賛する亜美の本性は、歪みまくりの超腹黒、自己中、意地悪、極悪。
端的に言えば、恐るべき二重人格者。

逢坂あいさか 大河たいが

凶暴凶悪。最強にして最凶。姿は可憐。極小にして魂はとら。
北村に片思い中。
竜児の家に住み着いている。

櫛枝 くしえだ
実乃梨 みのり

天才的猛獣使い・人嫌いの大河の唯一の親友。
ユニークで活発な女子ソフトボール部キャプテン。

北村 きたむら
祐作 ゆうさく

大河の片思いの相手。
賢く優しく気のいい優等生。
竜児の一番の親友。

前説 ? 1 (前書き)

北村の幼なじみにしてファッションモデル。

顔よしスタイルよしの詳細不明、正体不明、敵味方不明である川嶋亜美。が転入してきてから

もう季節は6月、プール開きの季節。

クラスメートとして竜児は亜美のぶりっこ仮面女っぷりを知りながらも、

同時に亜美の本性にも気づいていた。

そんな時大河が竜児に好意があると勘違いした亜美は、竜児の身柄をめぐり大河と水泳で勝負をすることになる。

大健闘するも泳げない大河は当然のごとく負けてしまい、竜児は亜美の別荘に行くことになる。

それに便乗するように大河北村櫛枝も別荘に行く事になる。が、それは本家のお話。

——もし北村と櫛枝が別荘について行けなかったら。
ソフト部の都合で予定が合わなかったとしたら。

別荘には亜美大河竜児の3人で行く事になったとしたら。

——
そんなお話。

前説 ？ 1

高須たかす 竜児りゅうじ

きれい好き&料理も得意、
どこに嫁に出しても恥ずかしくない高校二年生。
目つきの悪さは単なる遺伝。
クラスメートの櫛枝みのりにひそかに想いを寄せている。

川嶋かわしま 亜美あみ

女優を親にもつ、現役高校生モデル。北村の幼馴染み、季節外れの転校生。

——誰もが賞賛する亜美の本性は、歪みまくりの超腹黒、自己中、意地悪、極悪。
端的に言えば、恐るべき二重人格者。

逢坂あいさか 大河たいが

凶暴凶悪。最強にして最凶。姿は可憐。極小にして魂はとら。
北村に片思い中。
竜児の家に住み着いている。

櫛枝 くしえだ
実乃梨 みのり

天才的猛獣使い・人嫌いの大河の唯一の親友。
ユニークで活発な女子ソフトボール部キャプテン。

北村 きたむら
祐作 ゆうさく

大河の片思いの相手。
賢く優しく気のいい優等生。
竜児の一番の親友。

竜と虎とチワワ

夏休みも後半に差し掛かり、
既に話は流れたかと思われた

『第一回！高須争奪杯！あみたんVS手乗りタイガー戦』
の景品こと高須竜児は、
約束通り本当に別荘に向かっていた。

亜美の別荘までは特急列車で
およそ一時間半。

夏休みかつ自由席という事もあり
座席のほとんどは埋まっていた。

「高須くんってばあ〜！」

「おうっ」

ボストンバックやら荷物やらを
荷台にぽんぽんと置いていく
竜児にいつのまにかぴつとりと
亜美が擦り寄ってきた。

「ねえ、ねえ、

夏休みの間どーしてたのぉ？」

「どーって別に…どーもしてねえけど。」「もぉ、高須くんってば全然連絡つかないんだもん。

亜美ちゃんちょーっ寂しかったんだよぉ？」

チワワを思わせる大きな瞳で上目遣いに見てくるが、何度も同じ手にひっかかる竜児ではない。

「……おまえ、俺んちに電話かけてきた事ねーだろうが。」

「あつれえ、そーだったつけえ？高須くんてば顔に似合わず意外と細かい。」

「顔は関係ねえ。」

ギラギラと怪しく光る

高須の目だが、決して

「この女やられてえのか」

なんて殺意は持っていない。

高須基準で言うならば

ちよつとした、軽い

苦笑いの表情である。

「逢坂さんもあ、そんなむす〜とした顔してたらかわいい顔が台無しだよあ??」

と亜美がわざとらしく言うつと、

「あんたの気味悪い人工笑顔よりはよっぽどマシね。」

10倍返しくらいで言い返す大河。

「あのねえ…あんたがつまんなそ〜な顔してるところちまでつまんなくなるんですけどっ!??」

「ふんっばかりごときにあんた呼ばわりされるなんて私も落ちたもんだ。」

さつきから口を開けば

ケンカ ケンカ ケンカで

顔からは想像できないが

平和主義者+温厚な性格

の竜「だから顔は関係ねえって」

さっきから口を開けば
チクチクトゲトゲ…

ここは俺が場の雰囲気
を変えなければ！
と竜児は拳を固め、

「そつ そつだつ
2人とも、飯にしねえか！？
俺おにぎり作ってきたんだ。」

竜児の提案は予想以上に2人のハートを掴み、

「亜美ちゃんちょーお腹減ってたんだよねえ…」
「ねえ、はやくはやく」

「竜児にしては気が利くじゃないっ！
朝はバタバタしてたしお腹減っちゃった。」

と好評だった。

竜児も嬉しくなってきた

「ちょっと待ってるよ。」

と言い、エコバックから
少し大きめのお弁当箱を
出して膝の上に置いた。

ふたを開けると2人は
待ち焦がれていたかのように

「「おおっっ」」

と 仲良くはもった。

「竜児、中身は？ 鮭どれ？ 鮭が食べたい！ あっでも唐揚げとかもい
いなあ．．
鳥五目なんかも食べたい！」

「ああ、中身は梅干しだぞ。」

「「「……………」」」

沈黙はきつちり10秒ほど。

大河が頭に？を浮かべていて、
他には？と聞かれているような気がしたので
竜児は丁寧に説明し初めた。

「中身は、梅干しだ。

全部だぞ、全部梅干しだぞ。

鮭なんてないし、唐揚げや鳥五目なんてもっての他！」

と堂々の皆梅干し宣言！

体にいいんだぞ梅干し！

酸性の体をアルカリ性に…おぐうつ

大河にウザイと言われるのを避ける為、自分の頭の中だけで得意の
うんちくを語っている竜児だったが、

たった二本の細い指でもってぐさりととどめを……

正確にはぐぼつと音がして気づいたら目潰しされている状態。

い、いてえっ！

目が…目があああああ

「信じらんない！ほんとにあんたはただの駄犬よ。

いいや…犬以下！虫けら以下よこのゴミ虫！」

「な、なんで俺がそんな酷え事言われなきゃ」「なんでおにぎりがウ

メボシなのよ!!

しゃけが王道でしょ??主役でしょ??

なくてはならないかけがえのない存在こそシャケ…

これはおにぎりに対する冒瀆だわ!!

あんたおにぎりなめてんでしょ。ええ!？」

竜児は弁解する時間すら

許されずにいる中。

大河は竜児の作った

おにぎりに対する不満を

延々と口にしていた。

梅はサブでありメイン

にはなれないとかなんとか。

…しっかりとおにぎりを頬張りながら。

「亜美ちゃんもおゝ本当はシーチキン食べたかったなあ…

…もぐもぐ。あ、でもこれおいし♪」

「って文句言いながら食うなっ!

しょーがないだろ、

何日か家を空けるとなまものを置いておくわけにはいかないから、魚とかは旅行前日あたりから買わないでおいただ…って聞

けい！」

竜児はこんな予定じゃなかった
と呟きながらも二人の仲良く
食べる姿に内心ホッとしていた。

電車を降りてからは
20分ほど歩いただろうか。

「すっげえーな川嶋！
お前んちつてやっぱり
金持ちなんだなあ…。」

などと感嘆の声を漏らす
竜児だったが、気分は
もう最高潮に達していた。

周りに人がいなければ多分跳び跳ねていたであろっほどにテンションMAXあずまっくす。

楽園のようなビーチの前に

白い石造りのエントランス。

全体的にヨーロッパ風の家は
豪邸を絵に書いたような、
まさにそんな場所だった。

「こんなの大した事ないよお。
これくらいの家ふつうーだって♪」

と笑顔で謙遜。

この別荘がふつーの家ならば
我が家は犬小屋かそれ以外か。

そんな皮肉めいた事を考える竜児をよそに

「そーね。大した事ないわ。」
と 大河がバツサリ。

「か、かわいくない奴…。
じゃあ今から帰ればー??」

「帰ってあげてもいいけど、その時は私のペットである竜児も一緒に帰るわよ??」
あんた一人で別荘で過ごすのかしらあ??」

「…っこの性格ブス…！」

「なんともお言い。」

犬と猿なんかよりも
よっぽど仲がわるい
であろう虎とチワワ。

二人は無言のままにらみ合い
せっかくおにぎりを作り出した

和気あいあいな空気が元通りに。

「だからもうやめろってば二人とも。」

竜児の優しい制止の声では
二人の耳に届くはずもなく

「ふんっ」「」

と二人はそっぽを向いた。

「はあ…」

思わず竜児もため息をつく。

いや、こんなときこそ
自分がしつかりしなくては！
と思い直し邪念を振り払う
かのように頭をふった。

「おい！大河、川嶋あ！
今日いい天気だよなあ！
雲一つない空にキレイな海豪華な別荘が目の前にあつたらまずやる
事は一つだろ。」

せつかく来たんだから。楽しまなきゃMOTTAI NA I！」

「ふん、竜児にしてはまともな事言うじゃない。
確かにせつかく遊びに来たんだもんね。」

「とかいってえ、高須くんてば亜美ちゃんの水着姿みたいだけだつ
たりしてえ。」

各々言っている事は違うが
竜児の意見に賛成かと思えた。

しかし、竜児は…

「はあ？水着？んなもん後、後。
まず掃除してからに決まってるだろ。
さ、まずは二階からいってみよう」

先ほどのテンション
ハイの原因はこれだ。

海も空もキレイには違いない。

が、それよりもっと楽しくて今しか出来ないこともある！

竜児は早く別荘を掃除したくてしたくてうずうずしてたのだ。

これだけ広い別荘ならいくらあまり使われていないとは言っても、
ホコリはたくさんある。ぐぼっ

大河のボストンバックが
竜児の腹にめりこんでいた。

「どーしようもないバカ犬ね、あんた。目の前に海があつたらまず
泳ぐに決まってるじゃないっ。」

と、泳げない大河にまで竜児は説教される始末。

「けほっけほっ…い、いてえ。」

お腹をさすりながら呟く竜児に優しい言葉をかけたのは亜美だった。

「大丈夫う？大変だよねえ、高須くんって。いつもいつも逢坂さんのわがままにつきあってあげて。」

「なによお！？あんたには関係ないでしょ。」

言いながら亜美を睨み付ける。

「だって本当の事じゃない。
高須くんいたそー。」

「このヘタレ犬が大げさなだけでしょ！あたしのせいじゃないわよ。」

「まあまあ、二人とも。」

思わず腹の痛みも忘れて間に入る竜児。

「じゃあせつかくだから海にでも行くか…！」

本当は別荘の掃除をじっくりこってりやりたい竜児だが、二人の機

嫌を直す為
にと仕方なく提案した。

竜児涙目。

* * *

結局海にいつてからも
二人はあーでもない、
こーでもないと言つて
ケンカを続けていた。

冷たい水を的確に目や
鼻に向けて掛け合い、
フナ虫がびっしりつく
程フナ虫を投げ合い、

遠慮も手加減もなく
血で血を洗う戦い。

実際のところ、二人が
ふざけて冗談のつもり
でやっているのか、
本気のケンカなのかは

竜児にはよくわからなかったがそれはそれで楽しく過ごせている。

ケンカをなだめてから
3人で買い物に行き、
二日分の食料など買い
込んで別荘に戻った。

トントントントントン——…

まな板の音がリズムよく
かつ

スピーディーにリビング
の中に響き、竜児の料理
の腕はプロ顔負けで、
その手さばきは耳だけで
わかる程の腕前だった。

切るのが一段落した
ところで腕を捲り直す。

「ふう——…」

一人大きいため息をついた。

「りゅーうーじいー。
ごはんまだあー？」

大河の間延びした声は
いつも通り催促の声。

なんか普段とあんまり
変わんねえなあ．．
なんて考えつつ返答。

「ちょっと待ってろ。
もうすぐできるところだから。」

「ふあゝい。」

大河は大きくあくびをしながら
のんびりテレビをみていた。

サラダを手際よく盛り付けていき、よしあとは豚カツが揚がるだけ
|
|
|

「お腹減った。」

「だあっもう！それは20秒前にも聞いたから。いま作ってるだろう？」

「…うー。わかってるわよ、でもお腹へったの！」

「なっ…俺にどーしろって言んだ。大体お前が豚カツ食いたいなんて急に言い出すからカレーの予定が狂ったんだろうが。」

「はいはい、ありがとねー。」

と棒読みの大河に竜児が一喝。

「心がこもってねえ！」

「あんたはあたしに仕える為に生まれてきた犬なんだから主人であるあたしの為に動くのも、尽くすも、掃除も、洗濯も、死ぬのだって当然よ。」

そりゃあそうよね。よく考えれば竜児が私の為にキリキリ働く事は当たり前の事じゃない。

約束したんだし、それにあたしのおかげで生きてるんだから、あたしの為に働いてワンコの竜児は幸せでしょう？

そしてそれがあんた（ワンコ）の運命。才人だってよく使い魔の時働いてくれたわ。主であるルイズの為に。

…どう？心を込めて話してみたけど。満足？」

「た 確かに心はこもってたな…。」

だが、尋常じゃねえよその自己中っぷりは。…サイト？」

「竜児、手が止まってる。」

口を動かす暇があったらすこしでも早くおいしいトンカツを作りなさいよね。」

「さてさて、お前が話しかけてきたんだろーが。」

話しているうちに料理は完成へ近づき、後は皿に盛り付けるだけとなった。

すると、見計らったかのようなタイミングで亜美が二階から下りてきた。

「ご飯できたあゝ？？」

「おう、ナイスタイミングだな。」

いま呼びに行こうかと思ってたんだ、ちょうどよかった。」

「ちっ…ばかちーの来ないうちに肉という肉を全部食ってやろうかと思ってたのに。」

「あんたが言うつと冗談に聞こえないからやめなよ。」

「うん、だって冗談じゃないもん。」

宮迫の奥さんを思わせるような、もしくは定年を迎えたオヤジがテレビをみる体制のような、肘をつきつつ横になる横着なポーズで顔も向けずに大河は断言した。

竜児もこれにはもう何を言えいいのかもわからずにただ一言だけ。

「…お前の意地汚さにはあきれるよ。」

「それではみなさんご一緒にっ。」

「「いただきます。」」

お腹がペコペコの三人はそろって手を合わせた。

もう待ちきれないとばかりに大河の視線はおかずに釘付けである。

雰囲気から間接的にせかさながらもしっかりと挨拶を忘れないのはある意味竜児のしつけだった。

五つ子の子供がでてる
昼ドラと同じくらいに、

元気な声で挨拶。

もちろん音頭をとるのは
母・森尾由美役に見事
就任した竜児だった。

ぱくり、と亜美が小さな口を大きく開けて食べる。

「おいしー、さっすが毎日料理してるだけあるんじゃない？
家事に関しては高須くんの右に出るものはいないって感じたよねえ
」

などと亜美が誉めればお世辞が入っている、とわかっているても竜児
もまんざらではなく、

「そ、そんな事ねえよ。」

照れから、思わず凶悪犯人顔パーツの一部を染めていた。

だが嬉しい気持ちも長くは続かず、

「なに赤くなってるのよ気持ち悪い。
発情すんなっこのエロ犬。」

ま、まあ、私もまずくはないと思うけど…。」

「悪かったな、気持ち悪くて。」

すぐに大河にキツくダメ出しをされて、嬉しい気持ちも冷めてしま
う。

拳げ句の果てには

「竜児、ご飯おかわり。」

と偉そうにお茶碗を差しだしてくる。

「お前ってやつは。ごはんくらい自分で…。」

「おかわり!!」

「はいはい。」

大河に何を言っても無駄だと悟った竜児は、仕方なしにと言った感
じでごはんをよそう。

「あ、そんなにたくさん入れなくていいのに。」

と大河が呟いた時は、

「それなら最初に言えよ！」

と言いたくもなかったが、今ケンカの元になるような事は危険だ、と思ひ直しここはあくまでも冷静に対応。

大河のわがままさは
半端じゃねえな、やつぱり。

と竜児が大河の強情さを
今日何度目か、確認した時。

「高須くん♪亜美ちゃんには麦茶おねがい。」

そっぴや、もう一人いたな…目の前に超がつくほどのわがままな女が。

朝に比べるとだいぶ雑になった
中身ゼロの適当な甘え声と、
若干旅行で疲れてきた笑顔。

疲れてでもぶりっ子を続けるが
人にずっずしく頼むあたり、
本当に竜児達に気をつかってるわけではないようにみえる。

「ごちそーさまっと。
じゃああたしもう寝るわ。」

大河はマイペースに、端的にそれだけ言い残して二階に上がっていきこうとした。

「寝るわ…ってお前いま飯食ったばっかだろ。
食べてすぐ寝ると牛になるぞ。」

「普通の人間はねー。」

「お前だれだよ…。」

「つつこんだら負けよ。」

そんなご都合主義な言葉を残し、
竜児の言葉は完全にスルー。

大河は自分の使った茶碗すら
片付けず、眠そうに目をこすり
ながら二階へ上がっていった。

パタパタとスリッパの遠ざかって
いく音が、大河が部屋に入る事を

二人に知らせていた。

「まったく…しょうがねえな。」

自分の使った食器と一緒に大河の食器も片付ける。

口では文句言いつつも結局は大河の言いなりになってしまつ竜児に

「逢坂さんばかりずるーい。

高須くんが甘やかすから

どんだんわがままタイガー

が調子に乗るんだよお？」

ぷくつと頬をふくらませ目を細めながら少し困つたようにすねる亜美。

その表情は正直子供っぽくて可愛らしかったが…。

「別に俺はそんなつもりじゃ…」

「じゅーぶん、甘やかしてるよお。」

「わかったわかった、次からはちゃんと自分でやらせるから。」

「……ねえ、やっと二人きりになれたんだから逢坂さんの話はやめにしない？ね？」

「お前から大河の事話し出したんだろーが。…なあ、川嶋。」

「ん？なになに、真剣な顔しちゃってえもしかするとお、この可愛い亜美ちゃんに愛の告白？」

なんて冗談めかして笑ってみせる亜美。

「なっ…ばかつちげえーよっ。」

「じゃあ、なあに？相談ごとなら言うてごらーん、高須くんのためならあ、亜美ちゃん頑張っちゃうかもよ？」

モデルより女優が向いてるのではないかと思わせる程の自然な笑みは表情としてのいびつさなどみじんもない。

しかしどこか竜児を不安にさせるような、作った笑顔だった。

「あのさ…もういいだろそうゆーの。
俺はお前の素の顔知ってるんだし、いまは大河もいないんだからわざと見せつけてやるーなんて思わなくていいし。」

「え、なんのこと…？」

「だから要するに、俺と二人の時はそんな頑張るなってこと！普通に、もっと楽にしてくれよ。」

俺そっちの…意地悪そーなお前の方が好きだし。」

竜児がそう言った瞬間

亜美の顔がみるみる赤く

なっていきさつきまでの

余裕の亜美はどこへやら。

「あ、あんた…ばつかじゃないの！？」

…なに、そんな…さりげなく好きとか…／／」

少しうつむきがちになり普段の自信に満ち、堂々と胸をはった感じが消える。

「ん…どうした？川嶋？」

一方の竜児はいつも通り赤くも青くもない面で、悪人面の即逮捕、即裁判、即敗訴顔にかわりはない。

「べっ別になんでもないわよ。」

「ごちそうさまっ！」

言うだけ言って逃げて
いこうとする亜美に、

「ちょ…待てよ、川嶋！
話すんじゃないのか!？」

「亜美ちゃんはあるに話す事なんかないの！
高須くんってホント…ばか。
だからもう寝るっ。おやすみ！」

どんなに引き止めても影響はなく、結局竜児一人残されてしまった。

「『ばか』って…何の事だよ…?」

一人呟くも、竜児の質問
に答える者はいなかった。

* * *

「——んっ。ううは…?」

見慣れない天井をみて、
自分がいつもの敷き布団
に寝ていない事に、
ようやく気がついた。

どこだ？

と、続けようとした時。

竜児は遅ればせながら
昨日の事を思い出していた。

「そうだ、昨日は川嶋の別荘にきて…」

夜ご飯を食べてからは
風呂に入って、そのまま
寝ちゃったんだっけ…。

夏にしては少し肌寒く、
田舎の朝を感じさせた。

旅行の疲れがおかげで、
不慣れなベッドにも高さの違うまくらにも、
広すぎて落ち着かない部屋でも
竜児は爆睡だった。

「やべ… 朝飯の時間っ」

そして思っのだ。

大河が既に起きてたら…と。

時計の針を見た瞬間、竜児は弾かれるようにして飛び起き、パジャマ姿も気にとめる事なく1階へと降りていく。

「おそい。」

案の定大河はいた。

大きなテーブルのど真中にふてぶてと座る姿はまさに虎。

「おそいおそいおそい！」

手足をバタつかせながら
だっ子のように…いや、むしろだっ子そのもの。

「わるい、いますぐ朝飯を用意してやるから…」

「ビーフシチュー。」

「は？」

「ビーフシチューがいい。」

「いや、煮込み料理は時間かかるだろ。4、5時間は軽く。」

「ビーフシチュー食べる。」

「昨日サンドイッチのつもりで具も買っただけだ。」

「ビーフシチューがいい！」

「わ、わかったよ。つくるから。作りゃあ文句ねーんだろ？でも4、5時間だぞ？いいのか？」

「やだ、はやく食べたい。いまずぐ食べたい。」

「だから煮込み料理は…」

「やだ、はやくおいしいビーフシチューが食べたいの。」

「なっ…」

なんて女だこの女は。

こいつの中に意見を変えろという選択肢は存在しないのだろう。

これぞ自己中の極み……！

「……よし、わかった。要するに味がビーフシチューならいいわけだろ？ 作ってやろうじゃねえか。」

名付けて、高須特製ビーフシチューもどき！」

「名前ださ。」

「じゃあちよつと行ってくるな。」

竜児はそう言って、パジャマの上からパーカーを羽織った。

「どこ行くの……？」

「スーパーまで。ほら、昨日買った材料じゃ作れないから。なんか他に欲しいものあるか？」

大河のわがままに付き合いなお大河の意見を尊重しようとする竜児。

「やっぱいい。そこまでしな…」

——ガチャッ

大河の言葉を遮るようにして
亜美がリビングへ入ってきた。

「おはよ♪2人とも昨日はよく眠れたあ？」

「おう、ぐっすりだったぞ。」

「ま、まあまあね。」

「それはよかった…って高須くんどこか行くのお？」

「おう、ちょっと買い出しにな。」

川嶋もなんか欲しいもんあるか？」

「うーん、亜美ちゃん特にへーきかな♪昨日必要なものは全部買ったし。」

「わかった、じゃあなんかあったら電話してくれ。…そうだ、さっき大河なんか言いかけたよな？」

「なんでもないなんでもない！」

…そ、そうだ。ばかりー竜児の買い物についてってあげればー？ば
か犬同士仲良くすればいいわつ。」

「はあっ！？なんでこの亜美ちゃんが朝っぱらから買い物になんか
パシられなきゃいけないわけえ！？」

いきなりかわいいチワワは豹変し、『なんで私が』のたった五文字
でキャラ崩壊。

さっきまでの『』やら『ハート』のつきそうな語尾ではなく、い
つもより低い声で。いかにもいやっそくに。

「タイガー、買い物ならあんたが……あーなるほどね。ふーん、そ
おなんだあ。亜美ちゃん状況がわかつちやったあ。」

亜美のニヤリと笑う意地悪そーな笑い方には爽やかさがなく、
亜美のお尻から悪魔のしっぽでも生えてるんじゃないだろうか、と
さえ思わせる。

「な、なにがわかったのよ。」

亜美を睨むようにして見つめる大河の瞳は、見透かされる事を恐れ

ているようだ。

「べつつにいく。じゃあ高須くん、行こっか」

ふふん、と鼻をならしながら亜美の目が一瞬光ったように見えた。

「「なっ……」」

大河と竜児は2人して驚きの声を上げる。

まさかあのわがままな亜美が自分から買い物に付き合つと言うとは夢にも思わなかったのだろう。

「なんで逢坂さんまで驚いてるのよ？」

あ、もしかしてさあ、『ばか犬2人』って言えば面倒だしわざわざ私が買い物になんか行かないとか言うと思つてえ、『じゃあそれなら仕方ないから私が買い物ついてあげよ。仕方ないから。』みたいな事言つて高須くんと2人だけでお買い物するーなんて展開とか期待してたんじゃないの？」

亜美のもしもばかりの例え話は、竜児には何が言いたいのかさっぱりだ。

もし大河が買い物に行きたいのであれば素直にそういえばいい。そ

れに素直に言い合える仲だと思っ。

大河はほんの少しだけ頬を染めながら、それでも怒ったように

「ばっ、ばかちーのばかに長いばか丸出しのばかばなし聞いてるとこっちまでばかちーのばかがうつりそうだわ！」

と、どこかの検事のごとくバカを連呼して怒っていた。

「だからばかじゃねえっての！
ってかあんたこそ人のことばかばかうっせーんだよつ。
ばかの一つ覚えみたいに！」

「ちょ、まて二人とも！朝から何ケンカし…」「竜児は黙ってて！」

バチバチと二人の目線の先では
火花がちり、一人板挟みの竜児は
居心地悪そうに顔をしかめた。

「竜児もばかちーも嫌い！
さっさと買物でもなんでも行けばいいでしょ！ふんっ」

「って俺は何もしてねえぞ！？」

「もういいよ。高須くん行こ。」

そう言っで静かに竜児の手を取り
もう片方の手で財布を握ると、
亜美は玄関の方へ歩いて行つた。

大河は別荘から出ていつた二人
を窓から静かに見つめている。

「ばか竜児。なんで私を置いてくのよ…。」

そう言っでやっとなづいた。

竜児は私の犬じゃない。

竜児が好きなのはみのりん
で
竜児が今一緒にいるのはばかりなんだ。つて事に。

「竜児へのこの気持ちは…なに？」

* * *

別荘から少し歩かなければならない場所にスーパーがある。

なんでもかのうやのチェーン店で品揃えも豊富らしく、地元の人には人気があつた。

そこへ向かう二人は無言のまま。

亜美の華奢な体からは想像できないような強い力で竜児の手首を強く握っている。

「なあ、川嶋。」

「……。」

「おい、聞けつて。」

「…なによ。」

「腕、痛いんだが。」

今までただ黙々と歩いていた亜美がいきなりパツと手を離し、竜児から距離

を置いて立ち止まった。

「ごめん高須くん！
手、痛かった…よね？」

「大丈夫、そこまでじゃないから。」

本気で心配している亜美に大丈夫だということを伝えたくて竜児は
ムリヤリ笑って見せるが、
無意識に赤くなった手首をさすってしまった。

「でも…」

「そんな事よりさ、お前らってどーしてああやってすぐケンカする
んだ？」

竜児はだいぶ前から抱いていた疑問を口にした。

「私と逢坂さんなりの…一種のコミュニケーションかしら。」

「そんな言い訳誰に通用するんだよ。はあ」

竜児は少し大袈裟に肩をすくめてみせる。

「じゃあ…好きなものが同じとか？」

亜美は悪巧みをするように右の口の端をニッと上げた。

「好きなもの？…ますます訳わかんねー。」

「ほんと、鈍感なんだから。」

…でも、それはちびタイガーも一緒か。」

「ん？」

「べつつにいい。」

聞こえなかったんならいいよ。

ほら、そろそろ行こっか。」

そう言っただけで亜美は竜児に右手を伸ばしてくる。

「なんだよ、その手は。」

「なにっ？…手繋ぐのぉ。」

「…バーロー。そんな恥ずかしい事できるか。おっつ。」

亜美はコナ…竜児の許可を得ないまま半ば無理やりに手をとると、かのうやに向かって歩き出した。

亜美の瞳にはからかいの色がうつっている。

「…なんのつもりだよ。」

「お詫びよ、お詫び。」

どう？こーんなに可愛い亜美ちゃんと手繋いで歩けるなんてもう最高でしょ。」

「お前、自分を過大評価しすぎなんじゃねーのか。」

「なあに？嬉しくないわけ？」

普通だったらお金とるわよ。

3000円くらい。あ、一秒3000円ねっ。」

その後も他愛のない話は続いた。

「よし、じゃあまずは牛肉からいってみよう！」

目的地についた途端竜児は

まるで子供のように目をキラキラと…キラキラと輝かせ、今生きがいは何かと問われればコンマ一秒空けることなく買い物だと答えるであろっ。

「なんなのその目は。」

高須くん、キレてんの？」

「…笑ってんだよ。」

「あーだめだめ。そーゆう時は『キレてないっすよ』って言うのが常識なの。」

「その常識はどこで通用する。っーか、古いだろ。」

本人の意志とは無関係にヤクザを思わせる眼光の持ち主竜児と（黒のパジャマに便所サンダル）

端正な顔立ちに抜群のスタイルの煌めくような眩い美少女亜美（おとなしめの色の服にビーサン）
というような異色の組み合わせは
なんともアウエイといゅーか滑稽とゅーか…。

「ねえねえ、あたしたちって周りからどう見られてるのかなあ。」

肩がふれ合つかふれ合わないかの距離で隣を歩いていた亜美が竜児より先を歩いて、くるりと振り返ると、甘えた声で尋ねてきた。

「どつて…」

「高校生くらいの男女がパジャマ姿でえくしかもスーパーで2人つきりで食材なんか買ってたらあゝ周りの人はどー思うのかな？なんて…」

これはもしかして、事實はどうであれ第三者からみれば朝帰りのカップルかなんかに見えるのでは…！

いやいや、もし俺たちが大学生くらいに見えてたとしたらもつと…
例えば、例えばだが…

「…同棲してるように見えたりする…かもしれん。」

これが失敗だった。

竜児にとって人生最大の落とし穴といつても…
いや、それはさすがに過言か。

「きゃーははははははははははははははーっ！
やだもう、高須くんってばなに考えてんのさ!？」

「え、だつてお前が…」

「高須くん朝ちゃんと鏡みたあ？同棲つてありえないっしょ。

どっからどーみてもかわいい美少女の亜美ちゃんがヤクザに誘拐されてるか弱味にぎられて一緒にいるよーにしか見えないっつーの。

同棲だつてえ…自分を過大評価してるのはどっちよ！ぷ。

ひーおっかしー！けっさくだわー。」

悪魔は盛大に吹き出した。

それはもうゲラゲラと。

竜児に指なんかさしながら。

「くっ……！」

竜児に反撃の余地もなく、

自惚れた自分の言葉に後悔しせて悩みの根元である目元を隠すような仕草が竜児の精一杯の抵抗だった。

「生まれ変わったら負けないくらい絶世の美女になってお前の顔見て嘲笑つてやるからな！

…覚えとけよ！」

竜児の悪役面 and 悪役発言もなんのその。

高笑いが止むことはない。

「やだあ、高須くん。それって相当な美人でもないし敵わないくらいかわいって言うてくれてるのお？」

亜美ちゃん照れちゃう」あはは

「…なんて奴だ。林家ペーもびっくりなプラス思考だよ、お前って」

「なんか同い年なのにジェネレーションギャップを感じるんですけど…。せめて明石家さんまくらいにしといて。」

二人は当初の目的を忘れたかのようにスーパーで罵り合い、

（竜児が一方的に言われ続けたが）
最低限の買い物とちよつとした

お菓子なんかを買い終わると再び別荘へと戻った。

「ふう…ただいま。」

大した量ではないのにも関わらず両手いっぱい竜児は荷物を提げていた。理由は明白。

竜児の後ろを歩いてきた女王様は手をぱたぱたとうちわにしていって荷物を持つ気は無いらしい。

竜児の後から別荘へ戻り、玄関につくなり座り込んだ女王様は箸より重いものは持たない主義だ、とでも言わんばかりに当然のごとく手ぶらで帰宅した。

リビングの方からスリッパのパタパタという音がしてそつと大河が顔を出した。

「おかえりー… ってなにそんな地べたなんか座ってんのよ、ばかちー。」

「あつちーんだよ！
このくそ暑い中買い出し行ってきてやった優しい亜美ちゃんに労いの言葉とかはないわけえ？ええ？」

目を細め顎を出すようにして下から亜美は凄んでみせた。

「はいはいご苦労様。… ってあんた何にも荷物持っていないじゃない。何しに行ったのよ？」

「こいつ… 川嶋材料選ぶだけ選んだらさつさと行っちゃまうんだぜ？ひでえよな。… よつと。」

荷物を持つのも竜児。亜美が羽織っていたパーカーを持つのも竜児。

先に入っただのに鍵をしめるのも竜児。

亜美が座り込んだせいで狭くなった廊下を汗だらだらで飛び越えるのも、また竜児。

一方の亜美は暑い暑いと言いつつも、特に汗をかいた様子はない。

「だって亜美ちゃんつかれちゃったんだもん。」

「だったら何でわざわざ買物についてきたんだよ。大河と留守番しとけばよかったじゃねーか。」

竜児は口にしてから後悔した。

これじゃあまるで自分が亜美を拒絶してるように聞こえるんじゃないかと思ったから。

しかし亜美は特に気にした様子はなく視線だけは常に大河に向けている。

「…タイガーが素直じゃないからちょっと意地悪しただけよ。」

「……っ！」

意味がわからないと首を傾げる仕草の竜児をよそに、
大河の方は大きな目を更に大きく見開き、亜美の言葉が的を射ていたのか二の句を失っている。

やがて小さく息を吐くと、涙をのんで亜美を睨みつけた。

「ばかちーには…関係ない。」

「……っ！」

「ちよ、ちよっとお前ら落ち着けて。何言ってるのか…訳わかんねーよ。」

一人置いてきぼりを食らった
竜児は強気な態度で仲裁に入ってみたものの見事玉砕。

「（竜児は）（高須くんは）黙ってて。」

「……はい。」

「このままじゃタイガー絶対後悔すると思うよ。」

「しない。これでいいの。」

「あつそ〜。じゃあさつき私が高須くんと一緒にいるのみて何も思わなかったっ言いきれるんだあ？」

「…それはっ！……だから…ばかちーには関係ないって言ってるでしょ。」

ただ二人の話を聞くことしかできない竜児の頬に先ほどとは違う汗が滲んでいる。

自分の名前が出ているのにも関わらず話しに参加する事も話を止める事も出来ない。

竜児がどんなに頭を働かせても話の先は見えてこなかった。

俺が川嶋と一緒に…多分買い物時の事だよな。

あの時の大河の気持ちって…

置いてかれてさみしい…とか？

いや、そんな臆病な奴じゃない。

弱い部分もあるけど、あいつが俺と川嶋二人でいることに不安になるとは思えない。

自分から買い物行ってこい
って言っただから喜んだ

…っ てわけでもなさそうだし。

あいつは何を思ったんだ……？

「…ふーん。あんたって、そうやって都合悪くなったら逃げるんだ？ 関係ないって自分の気持ちから逃げたりするんだ？」

「うるさい、うるさい、うるさいっ！

あたしはちゃんとここにいる。あたしの気持ちも。逃げたりなんかしていない。

これがいいの！今のままでいいの！」

大河は少し涙目になりながらも叫んでいた。
虎が吠えるような強さなどなく、
そこには小さな一人の女の子の姿があった。

無意識に後退りしそうな足を一歩前に出す。

ぎゅっと強く握った拳はなにかに耐えるように震えている。

「違う…そうじゃないの。」

「え……」

亜美の意外な程真剣な眼差しと優しい声音に叫んだ大河の瞳が揺れた。

「ごめんね、別に追いつめるつもりじゃないの。そういうつもりで言ったんじゃないの。」

ただあんたには……ううん、なんでもない。それこそ私には関係のない事だから。」

亜美の言葉は重い。

普段のような軽口は消え、皮肉も愛想笑いもいたずらめいた瞳もない。

ただ真っ直ぐに話してるのがその場にいた二人にも伝わる。

次に大河が息をのみ、口を開きかけたその時

♪こーいは甘くて苦いもの♪

♪単純明解複雑怪奇な代物♪

どーでもいい事ばかり気にしたりするの♪

「え、えと…」

この状況を誰が予想しただろうか。

いいや、誰にも…神様にだって涼宮ハルヒにだって予測できやしないし、明治神宮のおみくじも細木数子の占いにも当てる事なんかできやしないであろうまさかのタイミング。

ヲタク風に言うならば携帯自重。釣り乙としか言いようがな（ry

簡潔にこの場を言い表すと、相応しくない軽快でKYでなんとも愉快な音楽が流れだしたと言いたいのだ。

犯人は——川嶋亜美。

亜美はパーカーのポケットからおもむろに携帯電話を取り出すと、なんとも言えない複雑な表情で液晶画面をのぞいた後、すぐにまた携帯を閉じてしまった。

「あ、ああ。あのね。
メールだった、うん。」

本当にお前女優の娘か？
と思わず聞いてしまいたく
なる程のわかりやすい嘘。

動揺の為かどもっているし、
音量も大きく長く鳴っていた。

メールの着信音でない事は
誰の目にも明らかだった。

「う、ごめん。ほんと何でもないから。」

それでも亜美は先程の話の続きでもするつもりなのか真剣な顔つき
で口を開く。

再び同時刻玄関前廊下にて、

♪こーいは甘くて苦いもの♪
♪単純明解複雑怪奇な代物♪
♪どーでもいい事はっかり気にしたりするの♪

思わず、どんな感じ？って聞きたくなるような曲が流れ出す。

ピンクのかわいらしいストラップを揺らし携帯電話は、着信音とバイブレーションでもって亜美の言葉を制した。

「だあっ…もう！しつけー！」

「あんたこそもういいから…電話でなさいよ。」

少し呆れた風に腕組みしつつ亜美の前で偉そうに仁王立ちの大河がこれまた偉そうに言った。

だが今回ばかりは嫌味ではない。

虎は虎なりに気をつかったつもりなのだ。

今から話の体制を立て直すのも不可能だと悟ったのか亜美は考えつつも黙って竜児の方へと視線を向ける。

「ああ…俺たちの事は気にしないでいいから。出るよ、電話。」

はあ、と一つため息をつく。

眉間に皺を寄せながら見るからに嫌そうだ。

「ごめんね…すぐ変わるから。」

「え…」

ちよ…変わるってちょっと
誰と電話してるんだよっ！

竜児と大河の心の叫びに答えるかのような言葉が返ってくる。

「あ……もしも祐作う？
なによ。なんか用でもあんの？」

「って祐作て……北村あ！？」

「き、き北っ…きたむっ…／／」

名前を聞いただけでさっきまでの大河の威勢はどこかへ行ってしまったようだ。

のび太くんがしずかちゃんの入浴中にドラえもんの道具によって風呂場を訪れてしまった時のように顔を真っ赤にして頂垂れている。

…ってその例えどうなんだ？

「あ、なに。そこに実乃梨ちゃんもいるのお？」

「きゅ…きゅしえだあっ!？」

「え…みのりんもいるの!？」

大河はまだ赤いままの顔を勢いよく上げた。

その隣で竜児は悪役面をほんのり染めて亜美をみている。

「げへへ…密室に若い女が二人。ちよろいもんだな…。」

などと考えている訳ではない。

実乃梨と電話できるかもしれないという事を心底喜び、同時に照れているのだ。

「はい、高須くん。」

「おう。」

ゴクリ。と竜児の喉が鳴った。

出来るだけさりげない素振りで亜美の携帯電話に手を伸ばしつつ、

鼓動は誤魔化しようのないくらいドクドクと高鳴り、亜美の声など少しも聞こえない。

待て待て。どうするこの後。

櫛枝と…なにを話せばいいんだろうか。さすがに電話で沈黙は気まぐずすぎるよな。

心の中でライフカードを探すが、なかなかいい札が見つからない。

リアルもギャルゲのように3択くらいで実乃梨✓に入れるのならば、フラグの一つや二つたてやすいのに！と思う作sy…竜児だった。

携帯電話を強く握りしめ、喋る前にゆっくり深呼吸。

ひっ ひっ ふー
ひっ ひっ ふー

「も、もしもし…きゅし…櫛枝かつ！？あのっ俺っ高須竜児だけどつあのっえつと…っ」

やはり効果はなかった。

沈黙する暇を作らせない為に逆に喋りすぎてしまう。
という緊張からくる焦り（あるあるw↑）が裏目にでたようだ。

しかし返ってきたのは聞き慣れた男の低く、嫌みな程にに爽やかな笑い声。

「おおー高須かあ！久しぶりじゃないか！」

「……っ！？…なんだよ、北村じゃねーか。」

残念なようなホツとしたような。

…いや、正直残念だ。

俺のドキドキを返せっ！と心の中では素直に舌打ち。

「なんだとはなんだー！

俺が電話の相手では不服か？

そんな残念そうな声だとされるとさすがの俺も傷付くぞー！はっは」

笑い飛ばしてもらおうと

少し気持ちも軽くなった

のか竜児の表情もゆるむ。

しかし自分の実乃梨への気持ちがばれてしまうのではないかと気が気ではなく、

「おうっ…いや、そういう意味じゃねえ！

ちよつとした早とちりで…てつきり櫛枝にかわったとばかり思ってたから緊張したんだ。

お前の無駄に爽やかな声でぶち壊し…じゃない。

お前だったから安心したんだ。」

「ならばよかった。でも緊張？櫛枝と話すのに…か？」

「ちちがっ…！いや、違わないんだがっ。別に櫛枝だからとかじゃなくて女子と喋るの得意じゃないからだなあ…！」

「あーなるほどな。俺も自慢じゃないが女子と話すのは苦手だ。だから気持ちは察するぞ。」

その言葉に安堵し胸をなでおろす。

ああ、俺の親友は鈍いやつでよかった。

「…しかしなんだ。さっきの呼吸法は。

お前は妊婦か！ラマーズ法か！…てっこんでほしかったのか！？古い、古いぞ高須！お前のボケは昭和の匂いがプンプンするぞ！30代に伝わるかどうか怪しいほどにな。」

「いや、そんなじっくりとボケについて検証されると恥ずかしいんだが…。」

「あつ…ちなみにプンブンっていうのは佐藤玉緒の真似でもおやすみプンブンとかけたわけでもないからな！はっは！」

「お前のギャグは誰になら伝わる…はあ。」

また意味もなく落ちもないボケかどうかすら怪しい台詞は竜児にやおいを連想させたが…まあここでは時間の無駄！暇潰し以下！としか言わないでおく。

「あ、そう言えばどうだ？」

亜美の別荘とやらの居心地は。」

「おう、予想以上の凄さだぞ。

家はでかいし海もきれいだし。

だがなんてったって家具がいいんだ！どれも海外のインテリア雑誌に載ってるような物ばかりだぞ！

このまま永住してもいい。

いやむしろさせて下さい。

まず究極のステンレスキッチンがあつてな。掃除もしやすいんだよこれが。

それから俺より背の高けえ白いオシャレなクローゼットがあつて…」

「ストーップ！もういいぞ高須。

軽い気持ちで聞いた俺が悪かった。まさかそこまで話を広げてくる

とは…。」

一見クールに見える竜児の容姿（特に眉毛の下あたり）とは裏腹にインテリアについてなら修造並みに熱く語りだすスキルが備わっている。

だが時すでに遅し。

その己の演説っぷりに気づいた竜児はポツと頬を赤らめ（もう一度言う可爱不い）大河と亜美の冷たい視線から逃げるようにして少し離れたソファアへと腰掛けた。

「お、おう。すまん。つい夢中になって周りが見えなくなっていた。…それでそっちはどうなんだよ。」

「そっちは俺と櫛枝の事か？」

「ああ。部長コンビは忙しいみたいだな…。別荘にもみんなで行ければよかったんだが…。」

「おお！その事は気にするな！正直行きたかったが、部長が2人も休む訳にもいくまい。夏休み中に一度くらいいつものメンバーで集まればよかったんだがな！」

「おう、また集まろうぜ。」

あ、お土産買って帰るよ。なんか希望はあるか？」

「…。」

「あれ、北村…？」

「……………」。

「どうした…？」

「……………」。

「おい、北む「モバGくれええええええええええええい！」

「……………おうつ！」

夏に相応しい明るい声が竜児の鼓膜を震わせる。

こんなテンションハイな女友達に心当たりは一人。

かわいらしくニカツと笑う顔を思い浮かべる。

何故クレクレ？なんていちいち突っ込んでいる余裕はない。

「…きゅ、きゅしえだあ!？」

「なんだい高須きゅん」

「ど、として、おおま、おまえが…でんわででででんだっ…」

先程の緊張再び。『で』が多いのはご愛嬌。

竜児は声を絞りだし、必死にコミュニケーションを取ろうとする。明らかに不自然な言葉につっこまないのなはお互い様だ。

「おうよ！部活前に高須くん達に電話してみないかー？って北村くんに昨日言われてさ。

2人で電話かけたのにずっと北村くんと喋ってるんだもん。おじさん横にいて妬けてきたもんだから略奪愛じゃー！」

「お、おう！それはすまん！」

櫛枝が妬いてくれた…

冗談でも俺を略奪してくれた…

櫛枝が。あの櫛枝実乃梨が。

おじさん…とかその変は俺の脳内で勝手にかわいく変換しとくから！

男子校生の妄想力なめんな…！

「ねーねー、さっきまで何してたのー？」

「……あの櫛枝が…略…愛…」

「ん？私がどーしたんだい？」

「…おうっ！」

今日これで何度目になるだろうか驚きの声を上げる竜児。まあ客観的にみれば電話で独り言を言う竜児にもビックリだが…そこも「愛敬だ。」

「高須殿？」

「どどーかしたか？」

「だから、さっきまで何してたのかなーって。」

「…う。それは、その。」

「うん？こっちは何気なーく聞いたただだから、高須くんも何気なーく返してくれていいんだぜ。」
それとも、今忙しかったかな？」

「いやっ！ぜ全然、全く。」

さつきまでは3人で…あの…お喋りしてたんだ。そう…深イイ話…
みたいなさっ！」

「ほえー。いーなあ、是非ともこの櫛枝めにもお聞かせ願えないだろーか？」

「え…」

「謎の転校生古泉ポジションあーみんなの深イイとは！
わしとて興味あるぞえ。」

しまった！と竜児は眉間に皺を寄せる。

少しでも真実に近く嘘にならない為の言葉が裏目に出たのだった。

言えねえよ。

さっきまで大河は泣く寸前で、川嶋も少し怒ってて俺だけ一人ボツと突っ立ってただけなんて……

言えるわけがねえ！

竜児の額を冷たい汗がつたう。

しかし、気がついた時には手から携帯電話がひったくられていた。隣でソファアの小さく沈む音がする。

「もっしもし。実乃梨ちゃん？あたしの事だれかわかるう？」

「おっ。あーみん殿！

本日もお綺麗ですなあ！」

「やったあ。そんなこないよお、今だってノーメイクだし、服だって部屋着だし……」

おい、コラお前らにはどこに目ついてる。電話だろ。電話！

本日もお綺麗ってなんだ。何が綺麗なんだ教えてくれ。

「ほんでさっき高須くんとも話したんだけどさ。あつしにもあーみんのふっきゃーいいーおはなすい教えてくれまへん？もう気になっちゃって。」

「話？なにそれ？」

おい！話合わせろよオ！

亜美の顔と電話越しに頬をくつつけるような体制で耳を押し当てていた竜児がキツと亜美を睨む。

「あーうん。そう言えばしたわ。そんな話。えーとね、AIRの話してたの。感想ってゆーかあ…泣けるよねー的な。」

おいおい、そんな話誰が信じる。

アホロン毛こと春田にさえばれるだろう。

家具の話以上に別荘来てる話ではないってのに。

とゆうか、作者アニメネタ多くないか？バレるぞヲタクっぷりが。

『国崎さいこおおおおおお』

「きゃっ」

「おっっ！」

『泣けたよね、最後には特に初めてのおつかい並みに泣いた！ぐすっ』

実乃梨の叫び声に思わずビクリと二人肩を震わす。

すんなりと信じ込んでいる。

アホだ。実乃梨は完全なるアホだ。バカテスならF組確定。

バカそうに見えて本当にバカな事に感動すらおぼえる。

「ちょっとお実乃梨ちゃんてばー声大きいよお、もう。」

『あいやー、失敬失敬！』

気づけば竜児は自然と笑っていた。

先ほどまで汗をだらっだらっ流して緊張していた自分が溢れるように心地好い笑い。

なんで――……

考えるまでもなかった。

川嶋だ。川嶋が助けてくれた。

竜児をフォローして電話も変わってくれた。何も言わずに。

俺の為？それは自惚れだろうか。

しかしその事実だけが残った。

しばらく話した後、部活の開始時刻が迫ってるとの事で電話は終了。

亜美の隣で会話を聞いていた竜児は、なんとなくホッとしている。

いつの間にかいなくなっていた大河は階段から降りてくると、途端に眉を吊り上げて竜児を見た。

「あつ、おい、大河っ。お前今までどこ行ってたんだよ？櫛枝からの電話変わらなくてよかったのかー？
北村もいたみたいだし。」

「うっさい、エロ犬！いちいち束縛すんな！

あんたこそ主人のいないところで何してるのよ。」

「なにつて…俺は別に。」

「なーにばかりと顔なんか近づけてむはむはしてんのって言うてんよー!」

「…おうっ!

してない、むはむはしてない!」

弾かれるようにして亜美から離れると、必死に首を振り頭の高さで手のひらをみせるようにして参ったのポーズ。

銃口を向けられた人質のように大人しく素直な反応だ。

こいつ、この俺様に睨みなんかきかせやがって。隙さえあればぶっ殺してやる。

などと考えている訳ではない。
純粹に大河を恐れているのだ。

「むはむはなんてしてないよ。あんあんしてたのお」

「ぬ、ぬわぁんですってえ…!」

大河の背後から炎がメラメラと燃え上がって見えるのは気のせいだろうか。

心なしか熱さすら感じるそれは、竜児の三拍眼にばかりとつつている。

「ち、ちがつっ… あんあんもしてねえ！川嶋っ悪ふだけはやめろっ。」

「ええ…？亜美ちゃんはいつも本気だよお？」

「ば、ばかやろっ！そんな事してないだろーが！」

亜美の余計な事しか言わない口をムリヤリ塞ごうとして竜児は手を伸ばす。

伸びてきた手をすつと首を傾けて余裕でかわした亜美は、今度は竜児の手首あたりをつかんだ。

その掴んできた手をふりはらおうとして力を入れるが…

…早い話、竜児が亜美をソファアの上で押し倒す形になってしまったのだった。

「やあだ、高須くんてば逢坂さんがいる前でなんてだ・い・た・ん♪」

さっきの続きがそんなにしたいわけ？」

「…続きって…おまつ！」

だから、してねえだろうがそんなもん！」

竜児は顔を真つ赤にしながらも怒りその場を動けないでいた。

「ぐふおっ……」

めりめりめりつと竜児の背中、腰のあたりから嫌な音がする。

一瞬何が起こったのかわからない、がわかってしまった。

この腰の悲鳴は誰の手によって引き起こされたのか。

ソファの前に移動した大河が、瓦割りのように四つん這いの体制の竜児を手刀でもって……スパーンと。

「この愚犬が…。ど淫乱チワワごときに惑わされるんじゃない。」

「だれがど淫乱チワワよ！」

「あんた誰にでもしつぱ振って愛想振りまいて、八方美人でまさにチワワじゃない！」

「ちげえーよ！亜美ちゃんが言ってんのはど淫乱の方だっつーの！
いや、別に八方美人を認めるわけじゃないんだけど…」。

「ってかあんたチワワの事悪くいすぎじゃない？この小説がチワワ
の中傷として強制非公開にでもなつたらどーすんの。謝りなさいよ、
全国のチワワとその飼い主さんに！」

「どおーも…すいやせんつした！」

「真面目に謝んなさいよ！ただでさえアイフルの件があつてからチ
ワワの人気は急降下してるんだからね！」

「ごめんねごめんねえー！」

「っておい！俺をムシして二人でケンカすんじゃないやねえ！」

「…ああ、いたの。」

「お前らの間で激痛にのたうちまわってただろーがぁ！…う…いつ
てえ。」

「つか、なにすんだよ、大河！肝心要の腰だぞ！俺を下半身不随にで
もする気か！」

「ふんっ何度言ってもあんたわかんないみたいだから、よそのメス

犬に手を出しちゃダメよーって体に叩き込んであげたんじゃない。」

「な、メス犬でお前…」

「ついであんたの腰を二度とへこへこできないよーにしようと思つたの。この際仕方ないじゃない。腰の痛みで不能にでもなんでも勝手になるといいわ。」

「全然仕方なくねえ！男の敵だ…。」

「あんた、今のところ強姦は未遂に終わってるけどいつその性欲が抑えきれなくなるかなんてわかんないわ。」

「本物の悪魔だよお前…。
って俺を犯罪者扱いすんなあ！」

「ま、もし相性のいいわんこと出会って、どうしても交尾したいーって言うならソファアの上なんかで押し倒さないで犬らしく外ですること。」

「こんな所で迷惑なのよ。」

「あの、ここ亜美ちゃんの家なんですけどー？なんであんたがめっ

ちやくちや偉そうにしてんのよ。亜美ちゃん意味わかんない。」

なんだかんだ言いながら俺達は、その後も旅行は帰るまで楽しく過ごせていた。

腰の痛みも笑ってるうちに忘れていき、今日起こった事も昨日起こった事も、
行きの新幹線のケンカも暑い中わざわざ買い物に行った事も、
全てがいい思い出となって俺達の中に残った。

—— いや、違った。

あの二人のケンカを除いてだ。

あの事については誰も触れない。
三人とも触れてはいけない気がしていたのだ。

俺は正直気になっていたけれど聞ける雰囲気ではなかったし。

あんたには関係ないでしょ？って言われたらそれまでだと思った。

…… まあ、俺が臆病だと言っしまえばそれまでなのだが。

それから最終日の事。

『そういや、大河だけ電話してねえけどよかったのかー？』
と大河に聞くと

『…うるさい。』

って返ってきた。が、そんな事はよくある話。俺は川嶋が

『今は、話したくないんじゃない？』

と言っていた事が気になった。

あいつは一言多い時と言葉の数が少ない時がある。

もっと俺にもわかるように言ってくれりゃあいいのに、なんて考え
竜児はくすりと笑った。

そうして、竜児の高校二年の夏は終わりを告げた。

前説 ? 2

夏休みに三人で旅行という一つの深い思い出を残し、あつと言う間もないほど速やかに時計は針を進め、竜児達を現実に引き戻した。

あまりにも自然に、
いつもの生活が始まる。

変わらないメンツ、
変わらない教室、
変わらない朝と夜。

それとすこし変わったなにか。

それもそんなの関係ねえ！
とでも言わんばかりに直ぐに秋を迎える。

長い休みが終われば文化祭の季節がやってきた。

出店に展示にミスコンや福男まで。

行事満載の大イベント！

そんなある日、大河の父親が現れ大河と竜児のなれあいの関係に波紋を投げかける。

——というのは本編の話。

——もし父親が出てこなかったら。もし大河が選出されなければ。

大橋高校文化祭

「へい、パスパス!」

「はいよーっ。」

「おい、能登! なにτετεれτεれ歩いてるんだよ。走れ走れ!」

「俺はこれガチで走ってんの。ほい、春田にパスつと。」

「わ、とと。あれ? ちよい待ってよ。いったん타임!

…高須)。俺らのチームはどっちに走ればいいんだっけ?」

体育館のコートを男女入れ替えて使いながらのバスケの授業中の事である。

今は午後の授業という事もあり、女子はいかにもだるっそーに男どものバスケしてる姿をみていた。

「あ、春田ボール持ったままキョロキョロしてる。超アホ丸出しなんですけどー!」

「…うふふ。それはそれでかわいいんじゃない?」

「全然力ワイくないってー!」

てか男子のバスケットたつて全っ然つまんないんですけど。
あ、まるおがボール持った。いけいけー、まるおー！」

「もう、麻耶ったら本当にわかりやすいんだから。」

そんな男連中の中にただ一對だけ鈍く光る両目は、高校生の中に潜り込み学校の不正を暴くため派遣されたスパイなんかではない。ただ必死にボールを目で追って右往左往する高須竜児である。

北村の出番がやってくると、
一部の女子達の視線が
バスケットの方へと注がれた。

例えば大河とか大河とか大河…

竜児は実乃梨もいまこっちを見てるのかな？かな？

なんて良く言えば乙女チック、
悪く言えば自意識過剰に考
えつつ女子の群れをチラ見。

胸躍る中、密かにいいとこ
みせなくてはと張り切り、
野ブタ。パワー注入 キラッ

今は敵である大親友北村は何人かを見事に抜いて、キュッキュツと
体育館シューズをならしながらろつきゅうを屈指し、真っ直ぐにドリブル。

球技が得意とかバスケの経験があるわけでもない竜児にとって北村からボールを奪うのはラスボス並みの高難易度だ。

とりあえず手を横に広げ

とうせんぼするようにして

北村の進行阻止を試みる。

が、竜児の手の下、脇腹のあたりをすり抜けようとする北村。

対する竜児は咄嗟に足を伸ばしてディフェンス。

今まで北村の手の中でバウンドを繰り返していたバスケットボールは竜児の足に当たり、思いもよらぬ方向へ転がり出した。

それをチャンスとばかりに追いかける竜児だが、偶然ボールが転がってきた位置にクラスメート（敵）がいたのでキッと一睨み。

「ひいつ…っ」

ガンつけるなんて卑怯だとわかっている。

それに人に怯えられるのも嫌いだ。が、今は一刻を争う事態。すまん、クラスメート（敵）。

大事な実乃梨がかかっているとあらば。恋する男は盲目なのだ、仕方あるまい。

クラスメート（敵）が後退ったすきをみて素早くボールを両手で拾う。

とったどおー！と叫んで自慢したい衝動を抑えつつ、竜児はチラリと女子の方を見た。

櫛枝は俺の勇姿をちゃんとみていてくれた！

俺がああ筋肉バカで有名な北村からボールを奪った所を……！
これってデイスティニー？

あれ……でもこのとりかたじゃあちよつと……格好悪くないか……？

バンッ

次の瞬間竜児の顔に衝撃がはしる。

竜児の顔面に投げつけられた少し固いそれは……体育館シューズ……？

投げ込まれた小さな靴を片手にゆっくり顔をあげると、ギロリと目で竜児を脅迫するように睨みつけてくる虎が一匹。

今度は竜児が悲鳴をあげる番のようだ。

大河は口パクで
きたむらくんにはじかかせんな。

「どんだけー……」

大河の自己中さに、思わず心の声がでてしまった。

お前どんだけ北村好きなんだよ。

とか

お前どんだけキレやすいんだよ。

とか

お前どんだけ足ちっちなんだよ。

なんて思いが竜児をIkkoさんへと変えたのだ。

理解不能な怒りどころだったが、その大河の斜め後ろあたりで、木原麻耶も竜児を睨みつけている。

虎というほどの迫力や恐喝まがいの脅しはないにしろ、必死で縄張りを守るうとする狐くらいには見えなくもない。

何で木原まで怒ってるんだ？

そんな事をボケーっと考えている間に、タイマーのデジタル部分は0へと変わった。

ピー————……

耳がキーンとするような、甲高い笛の音を合図に試合は終了した。

男子と入れ替わりにコートに入る女子は、JKのイメージをぶち壊すだらだらさ。もつとキャピキャピしてるもんだろ！？と思わず男性陣は力説するだろう現実とのギャップ。3次元マジック。

そんな中竜児はシューズを大河の所まで親切で持っていく。

「返せ、靴フェチ。」

今日も竜児はストレスを溜めた。

もちろん竜児はそんな事でいちいちキレるような性格ではない。

ただ、顔は別だ。JKをジロジロと嘗めるように見つめる三拍眼は青白く光り、竜児の表情を見ただけで思わずうさみちゃんが110番通報しかねない。

変態という名の紳士にふさわしい人相である。

そして竜児を含む男子らはみんなそろってマットの上に乗っかり、ごろごろと放牧された牛状態。

場所が場所なら

「ちよつとそこのリモコン取って。」

と言いかねない休日のお父さんスタイルとでも言い換える事が可。

「おーい、高須。さっきのお前なーにボール持ったままばーっとし

てんの。マジありえんて。」

「そおーだよ。俺がボールとられちゃったんだから仲間である高須がフォローしてくんなくちゃ！…いて。」

「春田がゆーな、春田が。」

お前のせいで北村にボール取られたんだよお？自覚をもて、自覚を。」

目の前でコントを繰り広げる能登と春田は文句を言いながらもどこか笑顔。

竜児は怪しく思いながらも、素直に謝罪した。

「すまん。ちよつと考えごとを…」

「はっはあゝん。わかつたぞ、高須。お前も見かけ通りいやらしいやつぢやなあゝ！」

「はあ…っ！？」

能登は女子を指さしながら、わざとらしくニヤけてみせる。

隣の春田もニヤけているが…こっちは本当にいやらしい事を考えている様だ。

春田はしまりのない顔を更にゆるませながらニヤニヤ2828。

「うつひょー、亜美ちゃんの生足だあ…。生足最強ー！サイコーー！フォー！」

「ドキドキがとまんねえ。俺はもし願いが叶うならば下からのアングルで見たい！」

「な、お前ら…っ」

2人のいやらしい視線…いや、2人なんてもんじゃない。

クラスの男連中はほぼ全員で女子の足やら二の腕やらを見ながら、口々に感想をもらし始める。

「亜美たんかわええ。俺の視界は亜美たんをロックオンした！」

「いやーほんといいスタイルすな。足首もきゅっとしてて胸も大きめ正に俺好み！」

「あんな抜群スタイルみんな好みだっつーの。」

「俺はタイガーの華奢な感じが好きだぜ！いつそキーホルダーにして持ち運びたい…性格はパスだが！」

「タイガーもかなりかわいいが、木原なんかどうだ？
あの見た目で男女交際の経験がないっていうギャップがいいじゃないか！」

「mjdk」

「だったらオレは香椎とか…」

それはもうみんな言いたい放題だ。Amazonでレビューを書くのに等しく、

「人を評価できる顔か」

とか

「じゃあお前がやってみろ」

なんて言葉はNGワード。

耳の痛い言葉は全てフルシカ。

自分の趣向を聞かれてもないのに話し始めたら止まらないものなのだ。

その証拠にさっきまでギラギラ…いやいや、呆れた目で見ていた竜児も女子の方をつい見てしまう。

竜児にあと少しの勇氣と勇氣と自信があれば

「俺は櫛枝がかわいいと思う!」

くらい言えただろうに。

まあ、その3つがあれば告白なんて容易いよな、なんて考えたりもして。

……— そっぴや夏休み前は大河と共同戦線なんて言って色々頑張った気がする。

あの時もバスケやって、変な作戦考えたりしたよなあ。

まあ、結局あいつは何やつても要領悪くてドジだから結果は失敗だらけだったんだが。

他にも櫛枝がジョニーズでバイトしてるからって、大河とよく飯食いに行った。

そこで初めて川嶋と会ったんだ。あいつ…俺がいる時はニコニコ2525してたのに俺らが席を外した途端に悪魔が乗り移って…いや、思い出すのはここまでだ。

こっから先は自主規制、放送禁止。

なんでってそりゃあ思い出したら夜トイレ行けなくなるからだろうが。

パイ————…

「おっつ」

女子バスケット女バスの試合が始まった。

本日竜児は2度目の瞑想から、

笛の音で現実へとひき戻される。

「おい、高須ももつと寄れ寄れ。」

竜児が考え事、というか過去を振り替えている間に話は進展してしまつたようで、一人を除く他クラスメートは全員あぐらをかき、昼間から会談話でもするようにみんなで大きめの円をつくる。

慌てて竜児も北村の隣、少しだけ空いたスペースに陣取ると、円の真ん中にいた春田が話し出した。

「……だから、文化祭でメイド喫茶とかクラスでやることにすれば、女子達のメイド姿がみられるって寸法だよ。」

「だけど、手のリタイガーとかが嫌がるんじゃないか？」

「そこは男全員で結託して多数決に持ち込めば文句なしの過半数。……どうよこれ？」

おお、と低くどよめく。

竜児もなんとなく話が読めてきたレベルだが、とりあえず一緒になつておお、と言つておく。

「よく言つた、春田！」

「アホだアホだと思つてたが、ただのアホではなかつたんだな。」

「それがわかつてお前の親御さんもさぞお喜びだろう。」

「お前ら春田を貶してるだけじゃねえのか…。」

竜児は春田を庇うようなツッコミをするが、当の本人は何も考えてない顔でへらへら笑っている。

とうとう言葉まで通じなくなったかと竜児が一番失礼な事を考えると、能登が勢い良く手を挙げた。

「ちよつと待った！メイドより、俺は断然チャイナ派だ！

……想像してみるよ、木原のチャイナ姿」身体のラインわかるし腿チラなんかもみてみてえ！」

おお、とまた低くどよめく。

「だったら俺はスク…」

「ちよつと、待った待ったあ！あんまりあれこれ言うなよ。俺そんな覚えらんないし。

それにこの時間内に統一させなきゃだめだろ！？えと…あの…だから…」

どうやら春田の少ない頭は容量が一杯になっているらしい。

誰もがそれを口に出さずとも理解し、哀れみの目で春田をみていた時。

そこに真の天才、生徒会役員、ソフト部部长、竜児の隣、露出狂こ

と北村が助け船を出した。

「コスプレ喫茶にすれば全て解決するんじゃないのか？」

* * *

結局北村の意見が全員一致の可決となり、只今作戦はリアルタイムで進行中。

リンクホームルーム

LHRでは連絡事項の伝達が終わると、クラス委員長の北村が議長の座を明け渡す。

入れ替わるように春田と亜美が教壇に上がってクラス全体を見渡した。

「議長なんてやるの初めて、緊張しちゃ〜う。

頑張ろうね、春田くん♪」

「う〜ん、がんばるう」

春田はつられて甘い声でくねっくねっと体を揺らす。

そのうざったいロン毛切ってやるおかあああああ！

なんて竜児はこれっぽっちも思っちゃんない。ノーテンキな奴だ…と呆れ苦笑いしているのだ。

「じゃあみんなご意見どうぞ」

横でくねくねと余韻に浸るアホの隣でリーダーシップを発揮する亜美は、議長が初めてなど嘘のように自然に話を進めようとする。

男子達はみんな目で合図し合い、言い出すタイミングをはかる。

いまか？

いいや、まだ早い。

言った方がよくないか？

じゃあお前が言えよ。

女子にひかれるんじゃないか…
上手くないんじゃないか…
きつと俺が言わなくても誰かが…

と皆が思い誰も手を挙げないという日本人の典型的パターン。

「はいはいはい！」

この状況下で能登は果敢に手を挙げた。

わざと軽口ではいを繰り返すのは、今とっさに考えつきましたよ

アピールだろう。

教室内は静寂につつまれ、ごくり。唾をのみこんだ。

ガラガラガラガラ——……

「生徒会から入電——っ！つい先ほど校長及び教頭からの決定が下された！」

突然人力でずかずかと入ってきた生徒会会長に、能登の声は勇気と一緒にかき消される。

男諸君は皆忍たま乱太郎ノリでズッコケたりしてみたり。

このクラスにいるどの男よりも男らしく振る舞う生徒会会長・狩野すみれは声を張り上げ自分のペースのままにこう言った。

「今年の文化祭は——クラス対抗戦っ！クラスの出店に対して人気投票を行う。

さらに今年はミスコンもあるからな！今日中に各クラス女子一名選出するように。男子は当日のイベントで自由参加とする。

更に総合得点で一位になったクラスには豪華景品が出る！

手え抜いたりしたやつはこのあたしが許さねえ！いいなっ！」

「……。」「」

「いいなっ!？」

「……は、はいっ」「」

北村がいる方をチラリと見た後、生徒会会長様様は近くに立っていた亜美に後は任したと、何やら薄いプリントの束の中から一枚を渡し足早に教室から去っていく。

嵐がすぎさった後なような静けさの教室は、コンラートのおやじギヤグ並みに白けた空気。

なんというか……狩野先輩、すげえ……って言葉しか思いつかない自分はボキャブラリーが貧困なのだろうか。

「はい、みんなー!それじゃあ早速優勝商品を発表しまあーす」

パンパンと手をならして亜美はクラスの意識を自分へと向かせる。

「まず一つ目は、来年から交換予定の最新型うるおいたっぷりエアコンを優先的に今月中に設置。」

「……エアコン欲しくね?」

「……うるおい欲しくね?」

「二つ目は、今年度一杯クラスに据え置き冷蔵庫設置。」

「…冷蔵庫、欲しくね？」

「…ひんやりしたお茶飲みたくね？」

「そして三つ目は、トイレ電源の開放。」

「…トイレの電源使いたくね？」

「トイレでコテで髪を巻きたくね？」

「そしてそして四つ目は、共用部分掃除の免除っ！」

「…掃除したくなくね？」

「特にトイレ掃除だるくね？」

「最後は、スーパーかのう屋の割引券。っと」

「…いらなくね？」

「…スーパー行かなくね？」

「欲しくね！？つか、割引券めっちゃ欲しくね！？！？」

突然会話に割って入っていったのは竜児。

トイレ掃除の免除なんかなくていいのに…と、さっきまでは背もたれに重心を預けみんなが騒ぐ中一人クールぶっていたのが、今では机に身を乗り出して大した関わりもない女子に自分の意見を押し付けていた。

「割引券欲しいよな？な？」

「や、別に…」

「え、ちょ、落ち着いて…」

少々興奮気味だった竜児は宥められてやっと周りが見えてきた様子。気まずさに、目元をかきながら椅子に座り直す。

「わりい。つい嬉しくなっちゃまって…」

「気持ち悪い。」

大河が一言。

「きもつ。」

亜美が一言。

「気持ちわ類ほさ科」

実乃梨が一言。

リュウジに1260のダメージ！

リュウジは激怒した！

リュウジは涙ぐんだ！

「たかすけに保坂はいねえ…！」

リュウジは遺言を残し机に突っ伏した！

死亡フラグたつ↓即死亡✓突入↓合掌。 〓なんとゆう犬死に。

「ささ、高須も死んだ事だしちゃっちゃと意見交換しちやいますか！
つてことで、じゃんじゃんご意見ばしゅーしまーす！」

「人の死をロスタイム扱いすんな！

大体春田！お前は、死ぬって言葉を軽々しく使ってはイカンぞ？そ
ーゆー口のききかたは…」

「黙れジジイ犬。アホにそんな事言ってるの？
なにその金八気取り。犬のくせにしゃしゃんな。」

「春田なんか目じゃねえくらい、お前が一番口悪いな…。」

「…ふんっ」

「そうそう、能登くんさっき意見言いかけてたよね？何だったの？」

「それは…。」

大河らを他所に亜美が少し遅れてさっきの件を思い出したようだ。
能登にもう一度チャンスが訪れる。

男性陣はみな拳を握りしめ、能登一人に溢れんばかりの期待をよせた。

「ええつと…何だったかなあ…」

おおい、はよ出すもんださんかい！と、ついアフレコしたくなるおつかないヤミ金顔の竜児も心の内では祈るような思い。

能登、俺たちの為にかんばってくれ…！

「…うちのクラスはコスプレ喫茶なんてどうかなあ…？」

キタ——！！！！

能登が神を越えたぞ！

俺たちの為によくやった！

勇者降臨

男子は声にならない喜びを机に忍ばせていた携帯で表現。
後ろの方の席の男子は皆一斉に携帯を握りしめ、能登へ激励のメールをうち始める。

「『ええ——！？』」

しかし予想はしてたが、それを上回る形で女性陣からは大ブーイング。

今までもろくに意見も出さなかったくせに、否定だけはしっかりするのだ。

「最悪！能登マジきめえつて。ただお前がコスプレを見たいだけじゃん！」

奈々子もそう思わない？と思うよね？」

「うふふ。コスプレなんて恥ずかしいわ。
でもあんまり言ったら可哀想だよ、摩耶？」

「ぐわー！コスプレしてもしかして銀髪？それともマフィア？はたまたちゅーぼーなのにテニスで大活躍？」

全部まとめてかかってこいやあ！この櫛枝にかければルパンのごとく完成度の高い変装をご披露する事も可能なのだ！ふわっはっはー」

「この前恐らくみのりんと同じ思考回路の人を原宿で大勢みたよ、若い女性を中心に…。」

もう、てんやわんやですよ。

竜児らのクラス、2―Cは他にはないほど異様な盛り上がりを見せ、担任の恋ヶ窪ゆり先生を困らせた。

それぞれ思うところもあるのか容易には決まらず、男VS女の討論は真剣十代しゃべりば状態。

男は、多数決で押し切りたいのになかなか上手く理解を得られずだし、女は女で、コスプレから逃れるためにどうしようか言葉を探すのに必死だった。

「では反対派の女子に問おう。

何故そこまでコスプレがいやなのか。それに、反対するなら代案を出すべきではないか？」

「……え、っ……」

やはりこの状況を打破できたのは北村だった。

嫌味や皮肉っぱさは少々あったように感じるが、真っ直ぐな瞳は、狩野先輩同様有無を言わせない力強さがある。さすが生徒会と言わざるおえない。

「どうなんだ？他にやりたいものでもあるのか？お化け屋敷か？それともプロレスショーか？」

とてもじゃないが、口で対抗できる者などいない。

北村が案を出して追い討ちをかけるのは女子から選択権を奪うよう
で、

急かして焦らすあたりもプロの手口と言えるだろう。

後ろの席の男連中はメールの内容はそのままに宛先だけを変えて送
信しているようだった。

結局北村の意見に特に反対出来る程この件に関しては強情な人もお
らず、コスプレの意見は通ってしまったのだ。

他のクラスと被ってしまうからという理由でコスプレ喫茶→コスプ
レ屋台へと少しだけ形を変えて。

「じゃあ、次はミスコンね。何か意見ある人はいるかな？」

「え、うちのクラスは亜美ちゃんでしょ。」

「うんうん。」

「ごつめくん、私は実行委員だから司会やんなきゃなんだあ。
だから誰かやってくれる人いない？」

問題はこちらの議題だった。

特に適任と思われる人もおらず、なかなか決まらない。

女子も皆、自分の事をかわいいと言ってるようで恥ずかしいのか自ら手を上げる者はいなかった。

これではさすがの北村もお手上げだ。

「じゃあないなあ〜ここはあっしが一肌脱ぎやすぜい！」

もう誰が喋ってんだか訳がわからなくなるような、男気溢れる話し方で突然立ち上がったのは実乃梨だった。

その声に反応して、思わずビクリと肩を震わせたのは竜児。

まさかの人物に、

自分もミセスの方に出ようかな…いや、でも俺がそんなの出ても恐がられるだけじゃ…

なんて早くも脳内作戦会議中。

「実乃梨ちゃんがやるの？」

「いつが〜い。そうゆーのやらないタイプかと思ってたあ。」

「あ、いや、そうでなくてね。」

私があーみんの変わりに司会やったるから、あーみんがミスコンにでる…って言うのはどう？」

おお、なるほど！と

納得する25名+独身。

ああ、残念…。と
落ち込むのはたった1名。

「えー？ホントに私なんかでいいのお？
実乃梨ちゃんがそこまでしなくても全然いいんだよあ？」

「なにを言ってるっしやるの！あーみんな先生がいなきゃ盛り上がり
に欠けるってもんですよ！」

元司会者は、やる気まんまんだがお約束の謙遜。
に対する現司会者もお約束化した過剰なべた褒め。

「やっぱりうちのクラスは亜美ちゃんしかいないよなあー！
俺ら皆のあこがれだもん。」

「ありがとう、春田くん♪」

「えへへ」

おい、騙されてるぞ春田。

竜児の心の声はひがみのようにも聞こえるが、この判断こそが正しいのだ。

亜美も内心では、
でもこれが当然の結果よね。だって亜美ちゃんが1番かわいいんだ
もん。あ、1番って世界中でね♪
でも亜美ちゃんが出たら1位確定だからミスコンつまなくなっち

やうかもお？

亜美ちゃん可愛すぎてKY？

でも仕方ないよね、持って生まれたものだもん。

せいぜい他のメンバーは2位でも狙って頑張ってるくらい思っているに決まってる。

* * *

「でもこれが当然の結果よね。だって亜美ちゃんが1番かわいいんだもん。あ、1番って世界中でね」

でも亜美ちゃんが出たら1位確定だからミスコンつまなくなっちゃうかもお？

亜美ちゃん可愛すぎてKY？

でも仕方ないよね、持って生まれたものだもん。

せいぜい他のメンバーは2位でも狙って頑張ってる」

「こいつ…本当にそのまんま言いやがった。」

これは放課後の事。である。

「そのまんまって…なんのことお？」

「いんや、別に。ただ俺はお前の事を相当理解してるようだぞ。」

「なにそれ、もしかして亜美ちゃんに片思い？
やだやだ困っちゃう。」

「ねえよ。」

「ちえ、つまんねーの。」

掃除も終え、落ち着きを取り戻した教室には竜児と亜美がいた。

お互い自分の席に座り、わりと離れた距離のまま竜児は振り返りもせず、声だけの返答を返す。

「よっしゃあ、終わった！」

言うなり万歳でもするように両手をあげガッツポーズ。

机の上に置いてあった茶色の本を片手に、他の教科書等をカバンに
っぱいに詰めてリュックのように背負う。

「それじゃあな、川嶋。お先に。」

「…ちょっと、お先にじゃないでしょ。」

「あん？」

「亜美ちゃんまだ作業してるんですけどおー？」

「おう。まあ、学級日誌なんて普段休み時間のうちに終わらせるもんだしな。俺の方はさっさと終わったよ。」

「……。」

「そんじゃ、また明日。」

「……。」

「ったくなんだよ。素直じゃねーな。手伝ってほしいなら言つことあんだろーが。」

「……………」

「お前は長門か！黙ってたらわかりにくいだろ。これ小説だぞ。」

「むかつく。」

「はあ!？」

「なんか高須くんが立場上って感じがムかつく。なんで亜美ちゃんをお願いしなきゃなんないの。」

そう言つて窓の外でも眺めるように竜児から視線を反らした。

手も止まっております、やる気をなくしたのか背もたれに体重を預ける。

「…お前、大河と性格似てきてるんじゃないか？」

「ちょっと、あんなやつと一緒にしないでくれる！？…ほんつと、ム力つく。」

「そ、そんな怒ることじゃねーだろ。」

「やっぱり高須くんの基準はタイガーなんだね。…それが一番…」

そこで言葉を止めた。

先ほどより更に気に触ったのか、亜美の表情は暗くなる。

最初竜児は冗談でからかってるんじゃないか、と考えたがどうやら違うらしい。

相変わらず視線は窓の外を見たままだった。

途端に沈黙がこわくなった竜児は少し焦りながら言葉を探す。

「おい、お前何言ってるんだよ？

基準で何のだ…？」

「…ふう。ねえ、お願い高須くん。亜美ちゃんを手伝って。」

「な、なんなんだよお前は！？……ったく返事になってないっつーの。ほんと…何考えてんだか。」

まるで会話のキャッチボールが成立しない。

例えるなら、亜美が気ままに打ったボールを竜児が必死に球拾いするも、受けとめきれずポロポロと球を溢していくような…。

ポリポリと竜児は頭をかきながら仕方なしにといった感じで亜美へと近づく。

さっきまで暗かった亜美の表情も、今ではわざとらしいくらい明るく元気に感じた。

そう、少し不自然なくらいに。

「亜美ちゃんみたいな美人の手伝いができるんだよ？」

もっと喜んで♪イタリア人なら自ら手伝わせて欲しいって言うわよ！。絶対。」

「…俺は純日本人だ。それに国民性なんてあてになんないぞ？言葉や髪の色でその人の何がわかる。」

「うーん、それもそっか♪」

——…って何説教なんかしちやってんだよ、俺は。

そうじゃねえだろ。

今は俺に気をつかわせない為の川嶋の配慮だったんじゃないのか？
だったらその気持ちをくんであげるのがベストだろ？

言い負かしてどーする。

目先の勝ち負けにこだわってるようじゃ、ただの偽善者じゃねーか。

こいつはまた無理やり笑ってんだ。

だったら、俺が――

「高須くん？」

「…おうつ」

何故ベストを尽くさないのか！

と、竜児が上田風に自問自答していた間にも時間は流れているようだ。

「私はクラスの外出許可書の用意と異装届けも出さないといけないから、高須くんは当日の司会の言葉を考えてくれる？」

「…ああ。」

「大体の流れだけでいいからね。」

「おっおっ、大体な。」

「はい、じゃあこれ去年の役員専用のしおりだから参考にして。それから、シャーペンとルーズリーフ。」

「ああ、なんかわりいな。」

亜美は一度ニコリと竜児に笑いかけた後、すぐに視線を書類に落とす。

めだかちゃん並みの高スピードで次々に作業をすすめていくのを見つめた後、竜児もはっとなって作業に取りかかる。

亜美の貸してくれたやけに年期の入ったごっついピンクのシャープンは、思いの外書きやすく竜児も作業に没頭する事ができた。

もう、何か言い出せるような雰囲気でもないのでこれで良かったのかもしれない。

カーテンに遮られた教室は、夕日にあかく染まる…なんて風情もなく、蛍光灯の元気いっぱいな光を浴びる二人は無言のまま。

沈黙はシャーペンの芯の削れる音を際立たせた。

「うん、ありがとう。お疲れ様。」

「本当にこんなんでいいのか？」

じつくりペラペラのわら半紙を睨み付けること、時間にして35分17秒。

つまり35分たちましたよっと。

集中したせいか、丁寧に書いたわりに早く終わらせる事ができた。

といっても去年のしおりが大活躍で、今年の予定に沿って言葉を並べ替えた程度のオリジナリティーの作品な訳だが。

「もちろん。ありがとうね。」

私の方は後少しだから、高須くんは先に帰ってて。」

「いや、待ってるよ。」

「でもまだ時間…」

「待ってるから。」

竜児は机の下で軽く両手に力を入れてズボンにしわを作る。

少し顔は強張ってしまったかもしれないが、その意図は亜美には悟られていないようだ。

「なあ〜んだ、高須くん亜美ちゃんと帰ってたんだあ？」

「挑発には乗らねえよ。」

これがいい機会だから一緒に帰る。…嫌か？」

「べ、別に、亜美ちゃん嫌じゃねえけど…。」

そうストレートに言われると何か調子くるうつてゆーか…。」

亜美は自分の頬を隠すように手で覆うと、不機嫌そうに眉をひそめる。

「邪魔しちゃ悪いから、俺は黙ってるな。」

竜児は亜美の前の席で椅子を半回転させ座り直すとじっと黙って亜美の表情をみていた。

「……………」

「……………」

「ちょ、ちょっとじろじろ見すぎ。顔こわいから、顔。」

「おっと、わりい、つい……。」

前髪をいじりながら視線を外にやろうと首を動かす。

…あれ？川嶋のプリント、なんか俺が書いてた簡単なのより、遥かに堅苦しい文章が並んでるよーな…

元々字も丁寧だが、普段より一層達筆だと思う。

つつか、俺より書くペース早くねえか！？

何倍などと具体的な数字は控えておく、比較すれば自分の無能さが

露見してしまうからな。
俺にもプライドはあるのだ。

しかし、いくらなんでも…

「なんかお前難しい事ばっか書いてるのな。明らか大変そーだし。
俺あんなんで大丈夫か？」

「うん？あぁ。これは先生に出すものだから。
でも高須くんのは実乃梨ちゃんしか読まないから大丈夫だよ。」

「なっ…櫛枝！？」

「ちょっと、何赤くなってるのよ。無言でのろけてくるのやめてくれるう？目障りだから。」

「ひでえな、おい。恩を仇でかえしやがって…。」

でも実際問題俺は役に立てたのだろうか。

クオリティでも劣るが、量にしたってどこをどう見ても川嶋の方が
こなしているし…

「そっぴや、なんでお前1人でやってんだ？
実行委員は1人じゃねーだろ。」

「あぁ、春田くん？春田くんなら用事があるのかなんとか…」

「あいつ、全部川嶋に押し付けやがって。明日俺が言っというてやる
うか？」

「うううん！いいのいいの！」

どうせ春田くんじゃいてもいなくても変わんないし。」

「そりゃーそーだよなあ。

あいつ裏口入学っぽいし。川嶋の作業の邪魔になるだけか。」

顔を見合わせ、ひとしきり二人は笑い合った後に、また沈黙は訪れた。

竜児は暇になり、カーテンをほんの少しだけ開ける。グラウンドではソフト部が練習をしているようだ。

本当は窓も開けて身を乗りだし、箱乗りのような体制でもってじつくりと練習風景を眺めたかったが、このプリント山積み作業の中風でも吹いて紙が散らばったら面倒だし、迷惑がかかるから見ない

…と言うのは世間様へ向けての心の中の建前で、

本音を言えばグラウンドから校舎は意外と誰が見ているかわかるらしく、自分が誰で誰を見るのかなど絶対にバレたくないからだっ
た。

一度練習を見てたら北村に手を振られるという事態が起きた為それ
を知ることになったのだが。

「ソフト部の練習でも見てるの？」

「おうっ！？違う違う、北村を探ただけでっ」

亜美は少し目を細める。

「まだ実乃梨ちゃんなんて言っていないってば。

二度ものろけてくんなっつーの。

亜美ちゃん高須くんの恋路なんかぜえくんぜん興味ねえーしい？」

本当に雑草でも踏みつけるような、マリアが百合女でも見るような目でちらりと顔を上げ竜児を見る。

かわいらしい顔にかわいらしい表情とかわいらしい仕草で紡ぎ出す残酷なまでに冷たい言葉は、好きな漫画がアニメ化したはいいが頭の中で思っていた声と違う！

ってシチュエーション時に受ける衝撃に酷似している。

「あれ、当たり前のように話してるが何でお前、俺が櫛枝の事…。」

竜児は言いかけてこの言葉を口にするのをためらい、目は狼でも口は餌を欲するこいのようにパクパクと開閉を繰り返す。

「なんで高須くんが実乃梨ちゃんを好きな事を知ってるかってこと

「？」

「ぶつ…直球…！？」

恐らく牛乳を口に含んでいれば今頃亜美の顔面には牛乳の雨が降りかかっていただろうし、お餅を食べていたら喉につまらせ竜児の人生ゲームオーバーになっていたことだろう。

蒟蒻ゼリーだって幼児でもないのにつまらせてたかもしれない。

そのくらい竜児はあせったのだ。
思いもよらなかった。

「高須くんてばほんとかかりやすいよね。…亜美ちゃをすぐ気づいちゃったもん。」

竜児との話を真面目に聞くふりすらせず、作業の片手間に聞いている亜美。

すらすらと書き連ねる文字の羅列を見れば、竜児の恋路に興味はないと言ったのもあながち嘘ではないのかもしれない。

なんとなく…本当になんとかなく竜児は、大河が家に初めてきた時の事を思い出した。

実乃梨宛のラブレターを見られた時のような恥ずかしい思いを二度も経験する事になるとは、あの時は思いもしなかった訳だが。

「その…川嶋は？」

「え？」

「川嶋はいないのか？…好きな人、とか。」

「え」

ポキリ

「いつてえ！」

竜児の瞳にストライク！

「ど、どうしたの高須くん！？」

「いや、お前の使ってるシャープンの芯が、俺の眼球を…！」

「あ、ごめんごめん！」

竜児は右目を擦り、ちよつと大袈裟な反応にも見えるが、痛いより驚きの方が強かったのだらう。

思った以上に大声をあげてしまった。

「はっはゝん。さてはお前、好きな人いるんだろ？
それを隠す為にわざと俺の眼球を傷つけよーと…」

「わざとじゃないわよ！…ってゆーか、狙ってシャー芯なんか目に
入れられるわけないじゃん。
バカでしょ、高須くん本当はバカなんですよ。」

「じよ、冗談じゃねえか。ちょっとした。
そんなムキになんなよな。自分が危なくなつた途端暴力に走るなん
て器が小さい…」

ポキリ

「い、いたたたたたたっ！」

竜児の中指はあらぬ方向にイナバウアー！

「やだゝ、高須くん今何か言つたあ？」

「いつてないいつてない！！！」

今度は亜美の細長い指によって普段曲がらない方向へ無理矢理ひつ
ぱられた指を、我が子を守る母親のようにしっかりと抱く竜児。

「ちょっと高須くん被害者ぶんでしょ。亜美ちゃんが酷い事し

てるみたいじゃん？」

「お前がしてんだよ！」

ふうふうと拳に生暖かい息を吹きかけ、指をさする。

「はいはい、亜美ちゃんが悪かったから。
高須くんてば泣かないの。男の子でしょ？」

「泣いてねえよ！
再度言うがこれは小説なんだから冗談か本当か区別つかない事は言うんじゃねえ！」

なんて読者に不親切なんだ。
なんて言ってる場合ではない。

「亜美ちゃん何言われてるかわかんない。聞こえない。」

耳に手を当てると、

われわれはうちゅうじん

的な小学生ノリで耳を塞いだり開けたりして聞こえないを表現。

竜児は呆れるを通りこしたが、殺そうとは思わない程度に冷めた目で見つめた。

はっ、もしくはへっ、と言いながら椅子に正しく座り直して腕を組む。

亜美も竜児のつれない態度にシャーペンも投げ出しむすつとしながら戦闘放棄。

しばらくすると髪をくるくるといじりだし、自分はもう関係ないですよと言った顔で足を組み背もたれに体をあずけた。

「おい、何やめてんだよ。」

それじゃあいつまで経っても終わらねえだろ。」

「……。」

「また黙秘かよ。」

「…………。」

「なんで俺シカトされてんの？ひでえ事ばっかされてるし。」

「うるっさいなあ…事故じゃん。」

「バリバリ聞こえてんじゃねーか！つか、シャー芯は事故でも中指は故意にやっただろ！！！」

「はいはい、やればいーんでしょ。」

そっだよ、やればいいんだよ。

と心の中で強気にでてみるも実際に言うなんて反抗的な態度をとらないところは竜児らしい。

竜児の性格などヘタレ主婦の5文字だけでかなり正確に表現できてしまうのだ。ああ、単純。

作業を再開してから早かった。

ハヤテのごとく…スピードはぐんぐん上がり、貧乏執事もびっくりな頭の回転。

手は止まらず、見てうつしてただじやないのかと思わず疑ってしまっ程にテキパキと仕事をこなしていった。

校内で小さく

用がないやつは早く帰りやがれ

を意味するメロディーが流れるのと同時に事務仕事も終了。

何とか今日中に間に合ったようだが、外はすっかり暗くなっており、部活動に励む連中も既に片付けなどを始めている。

まだまだ夏は終わったばかりだというのにその名残もない。

「結構遅くなっちゃったな。いっけね、泰子の晩飯…っ」

校門を出たあたりで突然母親の顔を思い出しすと、思わず立ち止ま
ってしまった。

「ごめん！ここまで遅くなっちゃうとは思ってなくて…時間大丈夫
？」

「あ、ああ。いや、別にお前のせいじゃないだろ。俺も邪魔しちゃ
ったし。」

「そんな事ない！全然そんな事ないよ。すごく助かった。一人じゃ
終わらなかつたと思うから。
でもこんな遅くまでごめんね。」

「いや、平気平気。」

素直に謝られてしまうと、何も言えなくなってしまう。

いつそいつものように
亜美ちゃんと一緒の時間を過ごせる高須くんは幸せ者だね♪
くらい言ってくれた方が気が楽になると言っのに。

早歩きで学校の前の長い坂を下りてゆく。

朝からのぼるのは少しキツイが、帰りは足も楽だし、何より今の季
節は風が心地よかった。

なので、入学当初は面倒に思っていた少し長いこの坂も竜児は意外と気に入っている。

特に理由があるという訳でもないのに、この時竜児がニコニコしていたのはその為だったのかもしれない。

「きゃっ…」

「…おっと。」

突然半歩先を歩いていた竜児の腕にすがりつくように亜美はもたれかかった。

「ごめん、なんか足がガクンってなっちゃって…」

「おいおい、大丈夫かよ。」

捻挫とかしてないだらうな？癖になると色々面倒だぞ。」

亜美の肩に片手を回し、少しのぞきこむようにして竜児は顔を見る。

「ごめん…。」

「なんだよ。お前らしくねーな。」

別に本気で怒ってるわけじゃなくてだな…俺はお前が心配で……」

「うん。ごめん…。」

竜児から手を放すと少し離れた距離のまま歩き出した。
いつもより頼りなくみえる亜美の背中を追いかけるようにして竜児も歩き出す。

「あのね、私と高須くんはずっと対等だっと思ってたの。」

「あ、ああ。…って…え？何だよ…いきなり。」

周りに人がいなくなった頃合いを見計らって、亜美は突然話を切り出してきた。

自分も話したい事があつた竜児は、訳もわからず頷ずいてしまう。

「きゃっ…」

「…おっと。」

突然半歩先を歩いていた竜児の腕にすがりつくように亜美はもたれかかった。

「ごめん、なんか足がガクンってなっちゃって…」

「おいおい、大丈夫かよ。」

捻挫とかしてないだろーな？癖になると色々面倒だぞ。」

亜美の肩に片手を回し、少しのぞきこむようにして竜児は顔を見る。

「ごめん…。」

「なんだよ。お前らしくねーな。」

別に本気で怒ってるわけじゃなくてだな…俺はお前が心配で……」

「うん。ごめん…。」

竜児から手を放すと少し離れた距離のまま歩き出した。いつもより頼りなくみえる亜美の背中を追いかけるようにして竜児も歩き出す。

「あのね、私と高須くんはずっと対等だっと思ってたの。」

「あ、ああ。…って…え？何だよ…いきなり。」

周りに人がいなくなった頃合いを見計らって、亜美は突然話を切り出してきた。

自分も話したい事があった竜児は、訳もわからず頷ずいてしまう。

「遠慮なんかしないで何でも言い合える友達だっと思ってたの。」

高須くんはもう覚えてないかもしれないけど、私が転校してきてすぐの校外清掃の日。すごい雨が降ってきた事あったよね。」

「ああ。懐かしいな。」

「あの日ストーカーに立ち向かえたのは、高須くんと一緒に居てくれたからなんじゃないかって思うの。」

きっかけをくれたのは逢坂さんだったけど、きつと一人じゃ何もできなかった。

もし、別の人がいてもあんな勇氣だせなかったよ。また逃げる方法を探したと思うから。」

私が自分で頑張ろうって思えたのは高須くんがいてくれたから。

高須くんが素の私を肯定してくれたから。高須くんの言葉で私は頑張れたの。」

「それは……よかったな。」

なんだか褒められているような、妙な気恥ずかしさがある。

竜児はこんな時どうやって言葉を返せばいいのかわからないのだ。

夏服で、風も気持ちいいはずなのに、耳のあたりが熱くなってゆくのが恥ずかしい。

「それだけじゃないよ。夏休みに別荘でも言ってくれたよね。俺の前では頑張らなくていいって。」

本当に嬉しかったの、ありがとう。」

にこり、と笑顔で感謝の気持ちを言った亜美は誰よりも可愛いらしかった。

普通の作り物ではないその笑顔はきれいで。純粹で。

いつもの大人びた風でもない。年相応にまだ、少しだけあどけなさを残した幼く見える表情。

「な、なんだよ、改めて言うような事じゃねえだろ。」

竜児がしきりに前髪をいじりだし、その仕草は赤くなってしまった顔を隠そうとすようにも見える。

「でも、それじゃあだめ。だめなの。」

「え………?」

「それだけじゃ対等じゃない。だっていつも私ばかり助けてもらってるから。」

対等って事だけが私にとって実乃梨ちゃんと唯一の差。それだけしかないんだもん。」

「は、はあ………?」

「それなのに今は逆転してる。私ばかりが甘えてる。」

「ええと……川嶋さん?」

いつの間にか話が読めなくなっていた。

何故二人だけで話しているのに、片方が理解できない内容を話すのか、というのは亜美の永遠の謎としか言い様がないのだが。

どう実乃梨がこの話に絡むのかを竜児が考えていると――。

「今は考えなくていいの。」

何も持っていなかった手にするりと亜美が腕を絡めてきた。

竜児の意識はそちらへ向き、一瞬で考えるのをやめる。

「お、お前が言ったんだろーが！」

「うん、だから言った亜美ちゃんがその言葉は削除って言ってるんじゃない。」

竜児はわざとらしく肩を落とし、はあ…とため息をついた。

「ずいぶん都合のいいやつだな…」

わかったよ。取り消しといてやる。もう考えないから、離れろって。

「

「それとこれとは別だもーん」

先程よりも強い力で腕を抱きしめられる。

「おうっ。しょ、しょうがないやつだな。

……っってお前んち確かここを真っ直ぐ行ったところだろ？俺こっちだから、じゃあな。」

「ちっ……なんか感じ悪い。」

「舌打ちするお前に言われたくねえ！」

竜児が立ち止まると、亜美の腕は何の未練もなさそうに離れていった。

別に寒い訳でもないし、自分から言ったくせに竜児はその呆気なさに少し寂しく思う。

「ばいばい、高須くん。」

「おう、気をつけてな。」

「うん。」

竜児が帰る方の道へ進みだした時、突然さっきまで亜美に触れていた方の腕が引っ張られる。

亜美の顔がすぐ近くにあるのは気配でわかった。

「え？かわし——」

ま、と言おうとした所で、

「私の好きな人はね……すごく、すごく優しい人なんだ。」

そう聞こえた。確かに聞こえたのだ。

「え？」

振り返ると亜美はにっこりと笑っていた。

また幼くみえる表情で。

少し頬が赤く見えたのは竜児の気のせいではない。

「バイバイ、高須くんっ。」

後ろ歩きで下がりながら小さく手を振る亜美。

少しすると、くるり、と方向転換して、何事もなかったかのように帰っていった。

「え？」

*
*
*

「た、ただいまー。」

「おつかえりい、りゅうちゃあんおそおい。」

「あんた、どこで油売ってたのよ。」

甘い声で竜児を呼ぶのは、高須泰子。スナック魅羅乃の魅羅乃ちゃんである。

もちろん同棲している彼女——なんて甘くとろけるような話ではなく、ただの同姓の竜児のお母さんだ。

もう一人、鬼嫁のように低く厳しい声で竜児を呼ぶのは大河。

将来ジャガー横田のような恐い鬼嫁になる事は今からでも容易に想像ができる。

こちらも同棲している訳ではない。彼女でもない。同姓ですらない。

竜児からすれば野良猫にエサをあげるのと同レベルの付き合い。お向かいに住んでる逢坂さんにご飯を恵んでいるわけだ。

……食費はしっかりもらっているけど。

「悪い悪い。ちょっと遅くなっちまったな。」

「やっちゃんお腹ぺコぺコだよ。」

「そうよ、やっちゃんもうすぐお店行く時間になっちゃう。
何やってたのよ、今まで!?!?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7777k/>

ちわドラ！

2010年10月28日00時43分発行